

声

中二・岡嶋 乙樹

確か七年前。日差しが強く、蝉時雨がうるさい夏の昼頃だった。私は香ちゃんと遊んでいた。香ちゃんとは幼馴染で親友のような存在だった。けれど、あの日から私は、香ちゃんと：いや、友達と遊べなくなってしまうた。「凜ちゃんの声って変だね。低いし、牛よりもひどいよ。」

それを聞いた瞬間、私は稲妻に撃たれたような感覚に陥った。私は逃げるようにその場から離れ、走って家に帰った。家に帰ると涙があふれ、泣いた。声を出さずに。お母さんに事情をきかれたが、話せなかった。というよりも声が出なかった。それから、香ちゃんとは疎遠になった。

今、私は中学二年生だ。未だ家族の前以外では話せない。話すのが怖いから友達はいない。話しかけられたときは、紙に書いて返事している。でも歌が好きで、家ではよく歌っている。部活は吹奏楽部に入った。みんなあまり話さないし、音楽が好きだからだ。このまま話さないで中学校生活をおくれると思っていたのに：厄介な人に絡まれることになった。絢ちゃんという子が話しかけてくるのだ。絢ちゃんはクラスの中心人物で、絢ちゃんの周りにはいつも人がたくさんいる。

「凜ちゃん、おはよう。」

「どうして話さないの？」

「声は出せるの？」

とよく話しかけてくる。

「声を出したくないから。」

と紙に書いているが：

「どうしてだしたくないの。」

「声、だしてみよ。」

とさらに話しかけてくる。どうすればいいの：

私は絢。中学二年生。今、すごく気になる子がいる。凜ちゃんという子だ。いつも本ばかり読んでいて、話しかけても声を出さずに紙に書いて返事するだけ。本人は迷惑かもしれないが、私は凜ちゃんと話したい。だからずっと話しかける。いつか笑顔で話せる日はくるのかな：

昼休みの終わり頃絢ちゃんがやっと席についた。私は小さくため息をついた。どうして絢ちゃんは私にかまうの？ 私に話しかけて何がしたいの？ 考えれば考えるほど、頭にハテナマークがうかんでくる。そう考えているうちにチャイムがなった。

号令した後、先生が話し始めた。

「今日は、合唱コンクールの曲決めをする。」

そう言った瞬間、周りがざわざわしはじめた。うちの学校では九月に二日間の文化祭があり、二日目に合唱コンクールがある。賞は金賞、銀賞、銅賞があり、みんな金賞を目指している。すると、先生がアンケートを配った。何の曲を歌いたいかと、指揮者と伴奏者、各パートのパートリーダーをやりたいかのアンケートだ。私は声を出したくないので、去年は伴奏者をしたし、今年も立候補しようと思う。誰も立候補しませんように。

後日、歌う曲が決まった。「空は今」という三部合唱の曲だ。リズムが一定で穏やかな曲なので、難易度は高くないほうだと思う。「指揮者の立候補はなかったから投票をする。伴奏者は凜だ。凜、よろしくな。」

伴奏に立候補者がいなくてよかった。指揮者は投票により、リーダーシップのある絢ちゃんに決まった。絢ちゃんは音楽経験がないらしく不安そうだった。パートリーダーがそれぞれ決まり、早速練習をした。絢ちゃんは少しテンポがずれていたが、音楽経験がない割に上手だった。練習していくうちに、ソプラノの下の「ファ」から上の「ファ」へ一オクターヴ上がるところで音が半音くらい外れている人がいると気づいた。本人は気づいてなさそうだ。音量があるため、つられかけている人がいた。アルトの音と外れているソプラノの音がぶつかり合い、さらにソプラノの音ともぶつかり合っているのですごく気持ち悪いハーモニーになっている。

練習を重ねるほど、どんどん悪くなっていった。その後の音までずれだしている。絢ちゃんも気づいたのか、音を確認して。と指摘していたが、直らなかった。外している人は分かった。指摘したほうがいって分かっていく。でも傷つけない。考えている内に一日が過ぎた。本当に指摘していいのか、悩んだ末、指摘することにした。後悔したくないし、終わった後、その人が責められるかもしれないからだ。そう決意すると、チャイムが鳴った。次は、音楽の時間だ。

音を外しているのは舞ちゃんだ。同じ吹奏楽部で、ソプラノのパートリーダーだ。彼女のプライドを傷つけることになるかもしれないが、彼女も本気で金賞を狙っている。だから声量もある。私は緊張しながら、舞ちゃんのそばに近づき、そっと肩をたたいた。

「何？」

と舞ちゃんが振り向いた。私は覚悟してこっそり舞ちゃんに紙を見せた。

「どうして歌えないアンタにそんなこと言われなきゃいけないのよ！」

突然舞の怒鳴り声が聞こえた。私はその時指揮の練習をしていて、急に怒鳴り声が聞こえてきて驚いた。振り返ってみると、顔を真っ赤にした舞と少しおびえているがしっかりと強い眼差しを舞に向けている凜ちゃんがいた。先生は練習のあい間の休憩時間に職員室に忘れものを取りに行ったのでここにいない。どうやら凜ちゃんが舞に音が半音外れていると指摘したらしい。私は舞と幼馴染で、気が強くプライドが高いのは分かっているがこんなに怒っているのは初めてみた。

「ちょっと舞、落ち着いて！」

「絢は関係ない。黙って。」

舞は、鋭い眼差しを凜ちゃんに向けて、

「歌えないくせに。偉そうなこと私に言わないで。」

そう言うと、凜ちゃんは何か書いて、こっちに向けた。

「舞ちゃんが一生懸命なのは分かっている。だからこそ、直すべきだと思う。」

と書いてあった。すると舞はさらに怒って言った。

「じゃあ、アンタが歌って見本みせてよ。」

どうしよう。ここで歌うなんて。でも、そうしないと舞ちゃんは納得してくれない。歌って本当に納得してくれるの？ 牛みたいな

声で？ みんなに笑われるかもしれない：

「何？ 人に言っておいて歌えないの？ 早く歌ってよ。」

みんなの前で声を出すのは怖いけど、馬鹿にされたっていい。納得してくれるなら。私は覚悟を決めて歌うことにした。

「すごい：」

「きれー：」

凜ちゃんが歌いだすと、クラスのみんながざわざわしはじめた。なんていうか：ものすごくきれいな歌声で、その歌声に私は引き込まれた。強い歌声だが優しさもあり、特に高音が美しかった。

緊張した。ピアノの前奏が終わってからの八小節を、アカペラで歌った。牛の声だからみんなに笑われると思っていただけけど、歌い終わると拍手が起こった。その後、舞ちゃんに音が外れているところを丁寧に教えた。舞ちゃんは赤くなっとうつむいて唇を噛んでいた。私は自然と声がでるようになっていた。その後、先生が戻ってきたので練習を再開した。ソプラノは、声量が落ちてしまった。

音楽の時間が終わった後、舞は勢いよく教室から飛びだしていった。

「待って！」

私が叫んだときにはもう舞は教室からいなくなっていた。みんなはそんな舞を気にもとめず、凜ちゃんの周りを囲んでいた。

「すごく上手だったよ。」

「あ、ありがと。」

少し恥ずかしそうに凜ちゃんが言ったがすぐに何とも言えない表

情になった。

部活がもうすぐ始まるが、舞ちゃんは来ない。いつも一番に来ているのに：本当に指摘してよかったのだろうか。このまま舞ちゃんが歌わなかったら、間違いなくソプラノの音量が落ちる。そうなる」と主旋律が聞こえなくなり、テノールとアルトが大きく聞こえてバランスが悪くなってしまふ。

部活終わり、片付けをしていると

「ねえ、」

という声が聞こえた。振り返ると舞ちゃんがいて、その少し後ろに絢ちゃんがいた。すると舞ちゃんはぼつが悪そうに、

「今日のごめんなさい。ええと：教えてくれてありがとう。とても分かりやすかった。だからもう一度、私に教えてください。」

私は嬉しくなった。私は自然と笑顔で

「うん。」

と答えていた。絢ちゃんは後ろで微笑んでいた。

それから私達は部活終わりに絢ちゃんと舞ちゃんと待ち合わせして練習している。舞ちゃんは飲み込みが早く、音を外さなくなった。絢ちゃんはテンポどおりに指揮をふれるようになった。いつの間にか一緒に練習する友達が増えてほとんどの人が参加した。話せる人がたくさんふえた。毎日学校が楽しくなって、クラスに団結力がでてきた。このままだったら金賞を目指せる。そう思った。

今日は合唱コンクールだ。緊張するけれど大丈夫。この日のために一緒に練習してきた仲間たちがいるから。次は私達のクラスだ。

全学年の合唱が終わった。もうすぐ結果発表だ。一年生の結果発表が終わり、泣いている人や喜んでいる人がいた。次だ。



画：金子恵

「続いて二年生。銅賞、A組。銀賞、F組。金賞、C組。」
私たちF組は銀賞だった。あんなに頑張ったのに：悔しい。する
と、
「このクラスの団結力はどのクラスよりも金賞だったと思う。」
と笑顔で絢ちゃんは言った。
「うん！ 金賞だった！」
後ろから元気な声で舞ちゃんが言った。